

第4版のはじめに

この本の初版発行から5年、そして第3版が出版されてから早くも2年になる。その間、科研費の制度自体はほとんど変わっていないが、研究環境は劇的に変化している。

多くの国立大学（旧国立大学というべきか？）で、国からの運営費交付金の減額が続き、研究室運営に大きな支障が出ている。大学から研究者に配分される、いわゆる教室研究費は非常に少なくなったところが多く、「光熱水費を払うと赤になる」との声を聞くこともある。また人件費削減のために新しいスタッフやテクニシャンを雇用するのは難しい。こと競争的研究資金に関しても、大型の研究予算を獲得できた研究者と、獲得できなかった研究者の間で格差がますます広がっているのではないだろうか。「21世紀の資本」（トマ・ピケティ／著、みすず書房）がベストセラーになっているが、実世界の格差の拡大よりも、研究世界の格差の方が、より激しいと思う。

このような時代に、科研費を基本的な研究資金として、獲得に力を入れている大学・研究機関が多い。とくに地方の大学、私立大学などでその傾向が強いように思われる。そのため、この本が出版されてから、多くの研究機関で科研費に関するセミナーを開く機会をいただいた。またその際に、多くの方の申請書を拝見する機会を得た。「もう少しこうすればいいのに」とか、「ここをもっとアピールすればいいのに」とか、実際の申請書を読むと勉強になることが多い。

これらの経験から得たことの1つが、最初の「研究目的（概要）」部分の書き方に苦勞している人が多いということである。そのため、今回の改訂ではこの「概要」の書き方の解説を工夫した。なんととっても審査委員が最初に読むのはこの部分だから、この概要はしっかりと書かないといけないからだ。

また日本学術振興会特別研究員の申請書については、これまでの版ではほとんど触れていなかった。それは自分自身の勉強が足らず、十分な内容のものが書けないと思っていたからだ。その後、ラボの大学院生の特別研究員申請書や、いくつかの大学で大学院生対象のセミナーを行った経験などから、少しは書けるかなと思い、今回の改訂では思い切って特別研究員の申請書についてもページを割くことにした。まだまだ不十分な内容だが、少しでもお役に立てればと思う。

研究を取り巻く環境は、今後ますます厳しくなっていくのかもしれない。この本が1人でも多くの研究者の役に立って、将来の素晴らしい研究成果につながるように願っている。

2015年7月

久留米大学分子生命科学研究所にて
児島将康

初版のはじめに

この本は研究費のなかでも、科学研究費補助金（以下、科研費）を獲得するための申請書の作成方法について、具体的なテクニックをわかりやすく紹介したものだ。

毎年9月になると次年度の科研費の申請が始まる。いうまでもなく科研費は研究費の基礎として非常に重要だ。科研費に採択されるか採択されないかは、研究計画やキャリアに大きな影響を与える。ところが科研費の採択率は現在では約20～25%であり、4～5人に1人しか採択されない狭き門であり、採択されない人の方が圧倒的に多い。科研費にはぜひ採択されたいと誰もが思うが、世の中には「科研費を獲得できる申請書の書き方」などのガイドブックがありそうだが、これまでに目にかかったことがない。各個人、各講座でのテクニックがあり、それはほとんど門外不出になっている。毎年春になって、その年度の科研費の審査結果が発表されると、毎回のようによく採択される人がどの大学にも研究所にも必ずいる。彼（彼女）らはいったいどのような申請書を作っているのだろうか？

そういった疑問をもったのがきっかけで、個人的にいろいろ調べた結果をもとにして、この本を書いた。いろいろな研究者の科研費申請書をチャンスがあればコピーさせてもらったり、久留米大学で保管されている過去の申請書を、無理をいって読ませてもらったりした。さらに科研費を審査する側の経験も積んで、他大学の研究者の申請書もたくさん読んだ。またラボ内の若手やスタッフ、知り合いの研究者などから相談を受けて、申請書作成の手伝いもした。このような経験からいうと、絶対に採択されるという申請書はないが、（多分）絶対に採択されない申請書はある。「科研費に採択されるのは宝くじに当たるようなものだ」「コネがないと採択されない」などと聞いたこともあるが、しかし、そんなことはない！ 科研費の審査はきわめてフェアなもので、しっかりと準備をしてよい申請書で応募すると、結構採択されるものだ。しかも宝くじよりもずっと当たる確率が高い。

若手研究者に「科研費の申請書の書き方は、どこで習ったか？」と聞くと、まずほとんどの者が「ラボの先輩が作成しているのを、見よう見まねで作成している」と答えるだろう。私もそうだった。実物の申請書は作成した個人がコピーを保管しているだけで、見せて欲しいと頼まないと、見る機会などなかった。私のラボでは毎年の申請書を全員の分をコピーして保存してあり、誰でもいつでも見ることができる。もちろん採択されたものも不採択のものも全部資料としておいてある。これらの資料は、これから申請書を書こうとする者に、非常に役に立っていると信じている。なんととっても実物の申請書に勝る見本はない。そこで、こ

の本では恥ずかしながら私の実物の申請書を見本として付けているし、本文中に出てくる例はすべて実物がもとになっている。ただし、内容は最新のものではなく、2～3年以上前の申請書のものを使っている。

第1章では、科研費とはどのようなものか、現状分析、科研費の種類、審査の仕組み、申請から採択までの流れなどについて紹介している。

第2章では申請にあたっての準備について書いてある。応募種目や応募分野の選び方や、どのような課題が採択されているかや、過去の審査委員についての調べ方を紹介してある。

第3章がこの本の中心部分で、実際の申請書の書き方をできるだけ実物の見本を示しながら解説してある。申請書の各項目ごとにポイントを書いて、どのように書けばよいかアドバイスしている。

第4章は書き上げた申請書をさらに読みやすくするための工夫について紹介している。また、わかっているようでやってみると結構戸惑う電子申請の仕方について順を追って説明した。

第5章は採択・不採択のときにどうすればよいかについて説明した。

この本に例としてあげた申請書は、久留米大学分子生命科学研究所のメンバーによる実物で、快く提供してくれたみんなに感謝している。また悪い例としたにもかかわらず、資料を提供してくれたメンバーには特に感謝している。また佐藤貴弘くん、佐藤浩くん、前原佳代子さん、高山優子さんの4名には「初めての科研費」として経験談をコラムにまとめてもらった。久留米大学研究推進課の梶原克彦さん、川辺貴光さん、村上郁磨さんと久留米大学分子生命科学研究所事務室の土岐陽子さんには、科研費の資料を快くみせてもらって感謝している。また羊土社の吉田雅博さん、冨塚達也さんには「実験医学」連載時からお世話になった。吉田さん、冨塚さんなしにはこの本は完成できなかった。

この本が少しでもみなさんのお役に立って、1人でも多くの方に「科研費に採択された」と喜んでもらえるようにと願っている。

2010年7月

久留米大学分子生命科学研究所にて
児島将康